

藤  
橋

特 259

547

3

5

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



3

梗概 藤橋

作者未詳

諸國遊歴の僧(ワキ)木曾路より北國に赴かんとて、飛驒の國船津の里に到り、谷川の景色を眺むる所に、日も西山に傾きたれば一宿を乞ふ。女主人(シテ)賤が庵なれどもと心よく僧を迎へ、夜もすがら回向を頼み、旭ヶ城主左馬ノ頭時盛が天正年中初秋、中の七日、夜遊の酒宴後、逆岸釜崎に襲はれ、舞の上手なりしその妻明石も亦、邪見の刃に伏し、物語をなし、旅僧の讀經を聞きつゝ、その夜明石のかづける唐衣を着けて舞をかなで、佛體となりけるを喜び、棚引く雲に消え失せて、川の音のみ聞えけるとなり。

此曲物着迄ハ開カニシツトリト詠ヒ後ハ優ニスラリト詠フヲ宣シトス

役別	装束	附	季
シテ女(明石)	ワキ旅僧	角帽子 着附無地熨斗目又小格子ニモ 水衣 腰帶 扇 数珠	月九
		面若女又ハ深井 髪鬘 髪帶 着附招箔 唐織着流 縫箔腰巻 胸箔腰帶 物着ニ紫長絹 鬘扇	曲柄 警古順
			目番三 (シ+鼓太)
			級一
			里ノ津船國驛飛

藤橋

素謡座席順 ワシキテ

ワキ僧上 ヌツカリ  
次才 ヨク  
拍子合  
身は雲水の定めなき。身は雲水の  
定めなき。浮き世の塵をいとはん

詞スラリ  
是は諸國一見の僧にては我この

程は木曾路にひひしが。又是より

北國に赴き。立山へ冬らばやと思

ひひ 道行上未  
ヤ 墨染の袖も露けき旅衣。

袖も露けき旅衣。木曾のあさぎぬ  
 おりのぼり。重なる岸に霧あめて  
 行くべき方もしらまろ。引くや宮  
 本の飛驒の國船津の里に着き  
 にけり船津の里に着きにけり  
 急ぎの程に。飛驒の國船津の里に  
 着きてい。あら面白や是なる谷川

を見れば。藤の釣橋を掛けて往來の  
 便とし。景色又いひがたし。山の風情  
 水の行方。兩岸の草樹を眺むる所  
 に。日も西山に傾きゆへば。此の里に宿  
 を借らばやと思ひゆ。ひくや車の  
 まゆの糸。ひくや車のまゆの糸。し  
 づの手業ぞせはしなき。繰り返す

○小謡

わくは手毎にかへれども返らぬもの  
 は谷川の流れも人の身の上と知れ  
 どはかなき命をば繫ぐ船津の藤  
 の橋渡りかねたる浮世かな住み  
 馴れし里の習ひの朝夕に。夢を忘  
 るひとふしを。夢を忘るひとふし  
 を。謡ひて繰るや白糸の。そのを

だまきユルのよるとなく書とも分ユルか  
 ぬいとなみのユル寄せてかへらぬ昔  
 ぞと思へば濡るユル袂かな思へば濡  
 るユル袂かな。早詞スラリいかに此の家の内へ案内  
 申しユル誰シテにて渡りユルはぞ。是は諸國ワキスラリ  
 一見の僧にてゆが。日の暮れてゆへは。  
 一夜の宿を御貸しゆへシテやすまアテ間

藤橋

の事にていへども。住みうかれたる  
 庵イナなれば。御宿は叶ひまじワキスラリい  
 いやそれは苦しからず。戒行頭陀  
 の出家なれば。ひらカッテに一夜を賃し  
 給へシテげに痛はしやさうながら。  
 敷く物もなき賤が家のいぶせきを  
 だに忍び給へカル上未一夜は泊り給拍子合ハスみ

○小諸

べしワキうれしやさらば泊らんと。  
 いふも他生の値遇の縁シテ宿世の  
 契又ニ浅からぬワキ柴の編戸を押しあけ  
 て下歌同伴中ひ入るや弓張の月も垣生の軒  
 浅りてサ淋サしき夜すがらイを。伏屋に  
 あかし給へ元ハや上歌同嶺シカに松吹く風荒  
 れてホ切嶺元ハに松吹く風荒れて。谷の

水音とありとありと。研も響く小夜礎  
 こと同み人もわくらにはに遠山寺の  
 鐘の聲。諸行無情と聞ゆるは浮世  
 の夢や。覚すらん浮世の夢や覚す  
 らん。シテ詞しかに御僧今宵はさる子細  
 の小程に。夜もすがら回向して給はり  
 へ。ワキウケチ心得申しゆ。気ラカハさて誰と志して

吊ひゆべき。シテウケテいんばそれにつま物語の  
 ゆ語つて聞かせ申しゆべし。なまき跡  
 をねんごろに吊ひて給はりゆへ  
ワキさらば夜すがら御物語ゆへ。シテ語昔左  
 馬頭時盛此の旭が城の領主たりし  
 天正年中の事か。とよ。頃は初秋中  
 の七日。夜遊の酒宴の興に乗じ。時

盛の妻。明石といひし人今様を舞  
 ひかなでしはかの唐土の玄宗が貴  
 妃となれにし驪山の昔もかくやと思  
 ひ出されて。秘曲に時も移り行く夜更  
 け丑満過ぎし程に。逆臣金崎といふ  
 もの。忍び入つて大將時盛の首をかく  
 其時明石立ち上り。當の敵に向ひしが。

カル種  
 拍子合ハス

終に邪見の刃の下。俱に朝日の露と  
 消え。思ひもよらぬ藤橋の。かゝる憂  
 き目を三つ瀬川。浮みもやらぬあさま  
 しさと。袖に涙のふることを語るに  
 罪の消えもせぬ。されば佛の教にも。  
 されば佛の教にも。如夢幻泡影。如  
 露亦如電と。まきく時は。頼みかたなき

藤橋

六



娑婆に來て。消ゆるは元の深みな  
れと。ひとかたならぬ悪人の手に朽  
ち果つる業因はそも。いつの世の報ひ  
ぞや。あかしと雖も晴れやらぬ。吊  
ひてたび給へ。跡弔ひてたび給へ。  
げに痛はしき物語。聞くも憂しや。  
うたかたの哀を添ふる袖袂。その名を

口ギ地上

あかし給へや。その名あかしと聞え  
つる。かの時盛の妻ぞかし。生死長  
夜の迷ひを。晴らさせ給へ御僧  
たへ罪科ありとて。此の御經の利  
劍にて。無明の闇を切り拂ひ。菩提  
の道に入り給へ。有難や今こそは。  
この逢ひ難き教にて。佛果に至る

地上

藤高

うれしやと甲 同上夕への月の照り添ひ  
 て上九界カクに見えし浮雲もくまなく  
 霽れて實相の法の道こそ尊と  
 けれ。法法の道ぞ尊とシテカまル上なり  
 なるこれなる唐衣こそ。その夜明石  
 のかづける姿いさいさ舞ふて御僧の  
 御勤めにも報せんと次身地上衣に落つる

○切蓮子

苔の露衣に落ちて苔の露がるや藤  
 の川橋明カニ夫れ高山の水は低きに流  
 れて能あり。同大乘の教は又下機を  
 渡するの利益あり。罪業深き身な  
 りとも。此の御經の縁に遇はばイハなカチ彼の  
 岸に到らざらんサシテ上殊に二つも三つも  
 なまき。唯一乗の法の徳。五逆の提婆

○獨吟  
仕舞

も成佛し同八歳の龍女だに無垢  
世界の記前を得る世尊の大慈を  
頼もし拍子合然るにたまたま人界に  
生を受けながら五つの障三つの  
罪。女人の身にはありと聞くまじ  
てや濁れる末の世に見惑の風荒  
く吹き思惑の波は猶高し前世の

罪にあへなくも。又の露と消えし  
身の。修羅の巷にわけ迷ふ涙の雨  
ぞやるせなき用ソ恐しやまのあたり。  
阿鼻焦熱や叫喚の獄卒四方に  
群りてうらたてうらたて鐵杖の  
苛責。苦患のひまなきに此の御經の  
功カにて忽ち得脱し三十二相備は

藤馬

七

〇獨吟  
 仕舞  
 拍子三合  
 シテ  
 カテ  
 シテ  
 〇  
 常樂我淨の春の花  
 眞如の月  
 山に耀く眞如の月  
 虚空に降り  
 歌舞の菩薩もどり  
 音聞え  
 謠ふも舞も法の聲誠に妙なる  
 奇特かな  
 是ぞ娑婆即寂光

淨土。悟りに夢も醒め醒めて。  
 無作三身の曉もひらくは鐘の  
 音。鶏の聲。たなびく雲は紫の  
 たなびく雲こそ昔を残す。紫の  
 藤橋に。川の音のみ残りけり。

藤橋に  
 川の音のみ残りけり

〇

跋

古よりの能樂、外題のみにても其の數夥し。試みに當流の現行本を見て指を屈するも、既に二百を過ぐ。然りと雖も題材を國別に分類せんか。遠く唐土に及ぶもの多々ありて猶、國內六拾餘州に漏る、國々少しとせず。翻つて當流の隆昇を精察するに、日に月に、津々浦々に、擴張せられつ、あるは言を俟たず。これ宗家並びに一門の、地方統一、趣味の開拓に盡力せらるゝ賜物と、又國粹保存に留意する志士の漸く多きを數ふるに至りし爲ならんか。

茲に、飛驒の國に題材を採れる「藤橋」を得て、觀世流、藤橋會の推賞を喜び、廿四世觀世左近先生の聞を乞ひたるに、檜書店又、直ちに賛せられて古書の復刻を敢行さる。

或は史實に、或は傳説に據りて、一國一曲の謠曲をものせらるゝ人々の爲に、「郷土の誇り」として先づ此の一書を示さん。

編者 識

昭和八年十二月十日印刷  
昭和八年十二月十五日發行

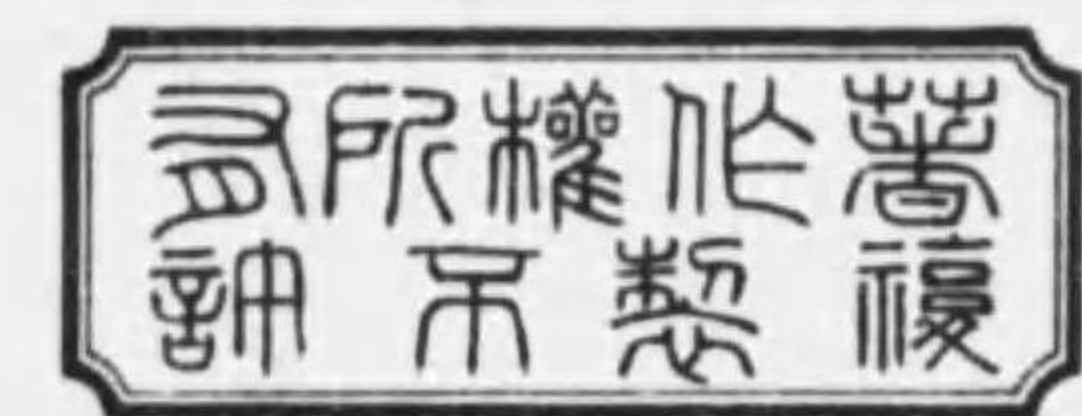
(非賣品)

廿四世

觀世左近閱

京都市上京區三條通鉄屋町東北角

發行兼者 檜 常之



頒布所 觀世流 藤橋會

岐阜縣古川郡船津町十五番地

終

